フィールド（現場）からの風 ㊷

宮田守男

10月1日の中秋の名月、月が凛と輝く郷愁を誘う景色に、自然の大切さを改めて感じる。日に日に日暮れが早まり、空の主役が太陽から月に代わる季節、夏に森林などを旅した赤とんぼが産卵で里に戻ってきたのだろうか。よく見かけるが、生息するための水環境は耕作放棄地の増加で年々厳しくなるばかりだ。

信州大学大学院在籍中に指導いただいた下田平裕身教授。家庭の事情で奈良・生駒に転居してから「コロナ通信」の題目で、社会情勢に対して論議のきっかけになればと便りを頂いている。このコラムでも多くの人に考えてほしいとの願いを込めて紹介したい。

「大げさですけれど、私たちは、人類の歴史の中でも数少ない大変な体験をしているという気がします。日常ではない…まさに非日常、非常時に置かれている。コロナから身を守り、日々の暮らしを続けて行くのも大変で

学びに定年がない事を思い続ける事が大切だ

も、同時に、この体験の中でこそ、ふだん見えなかった事が見えてくる。非日常であるからこそ、人間の生活の深い問題を改めて突き詰めて考えられる。そんな機会を与えられている…。そうした思いから、コロナの自粛生活の中でどの様に考えているのか」と、今、見えてきている事にじっくりと向き合わなければならないと問題提起する。

そして現況を戦争に例えて、「これはまさしく戦争ですよね、第二次大戦と言う世界規模の戦争が終わった後も、私たちは、多くの戦争を体験してきました。朝鮮戦争、ベトナム戦争、中東戦争、湾岸戦争…しかし、これらの戦争は、すべて局地の戦争でした。今回のコロナの戦争は、全世界が同時に戦争に巻き込まれている」。

しかも、今までとは次元の異なる戦争。自らも命を狙われる戦場に身を置き、恐れおのの、身を守る武器もなく、ただ逃げ回り、身をひそめるばかり。

日本は、どちらかといえば、中央集権、上位下達の国。だが今回は、自治体リーダーや医療や福祉や生活支援の第一線の現場にある人の重要性が目立った。実際、国の指示を待ってから行動するのではなく、自分から方針を打ち出して、行動しようとする現場リーダーたち。これに、中央が役割を取り戻そうとして、再び規制を強める動きに、コロナの戦いから、日本社会が学んだ現場の自主的な行動を定着させていくか―との問いに、改めて考えさせられた。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）

下田平さん。大学院の教えでも「現場主義」の大切さを訴え続けた